

イアン・マキューアンの最新小説Nutshell : 胎内に閉じ込められたハムレット

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-06-25 キーワード: イアン・マキューアン, 最新小説, Nutshell, Hamlet, 胎内の赤ん坊 作成者: 武藤, 哲郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6548

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



イアン・マキューアンの最新小説 *Nutshell*

—— 胎内に閉じ込められたハムレット ——

武藤 哲郎

【キーワード】 イアン・マキューアン, 最新小説, *Nutshell*, *Hamlet*, 胎内の赤ん坊

はじめに

イアン・マキューアン (Ian McEwan) の 14 作目となる最新小説 *Nutshell* (2016) はシェイクスピア生誕 400 年を記念して *Hamlet* のプロットを下地にしている。さらにユニークなのは語り手が母親の胎内にいる 9 か月の赤ん坊なのである。つまり、胎内に閉じ込められたハムレットが母親と伯父の父親殺しの謀略に耳を傾けながら何もできない状態になっている。果たしてその赤ん坊は父親殺しの復讐を逡巡している「行動できない」ハムレットなのであろうか。それとも何らかの復讐を企てる「行動する」ハムレットなのであろうか。

マキューアンのこの小説における意図は何であらうか。*Hamlet* をパロディー化するのが目的なのだろうか。読者に伝えたいモラルはあるのだろうか。マキューアンは *Atonement* (2001) の中で、「小説にはモラルは必要ない。それぞれの登場人物の意識を生き生きと描くのが小説家としてのモラルである」と言っている¹。読者が小説にモラルを求めるのはもう時代遅れなのかもしれない。

マキューアンの小説には必ず 4 つの要素、「グロテスク」「歴史・社会」「ユーモア」そして「モラル」がある。体液の 'four humours' のようにその混ざり具合によって彼の小説はまるでカメレオンのようにその様相を変える。グロテスクが多ければ初期の短編集 *In Between the Sheets* (1978) に、歴史・社会の要素が強ければ *Black Dogs* (1992) に、ユーモアが目的ならば *Amsterdam* (1998) に、そしてモラルを描きたければ *Enduring Love* (1997) になる。*Nutshell* の場合、*Amsterdam* のあのブラック・ユーモアをまず思い起こすが、この 4 つの要素がバランスよく調合されているので読んでいて確かに面白い。面白おかしく恐怖も交えて楽しく読ませ、それに今まで知らなかった知識・情報とわずかのモラルがあれば読者は満足する。

Nutshell は *Hamlet* を下地にしていて、語り手が胎内の赤ん坊という二重の仕掛けが凝らされて今までの小説にない画期的な試みになっている。ところが、逆にそれが足かせになってマキューアンの首を絞めているのも事実である。Kate Clanchy は次のように述べている。

This may not sound like an entirely promising read: a talking foetus could be an unconvincing or at least tiresomely limited narrator, and updatings of Shakespeare often strain at their own seams.²

Book Marks の Literary Hub では *Nutshell* の評価を B⁺としている³。読んでいて確かに「軽い」感じは拭えない。この小論は *Nutshell* の小説としての完成度を議論するのが中心ではなく、そこにあるわずかながらのモラルが何であるかを明らかにするのが目的である。

1. 語り手としての赤ん坊

小説の冒頭は次のような文章で始まっている。

So here I am, upside down in a woman. Arms patiently crossed, waiting, waiting and wondering who I'm in, what I'm in for. I've no choice, my ear is pressed all day and night against the bloody walls. I listen, make mental notes, and I'm troubled. I'm hearing pillow talk of deadly intent and I'm terrified by what awaits me, by what might draw me in. (*Nutshell*, p. 1.)

「だから私はここにいる。ひっくり返って女性の体の中に」というショッキングな出だしでこの小説は始まっている。「これからどんな自分になるのか、腕を辛抱強く交差させて待っている」と続く。生まれ出る世界に赤ん坊の選択の余地はない。彼は聞き耳を立てているが、何やらベッドでは良からぬことを企てているらしい。「私を待っているのが何なのか恐ろしくて仕方がない」というのが上の引用である。*Nutshell* の冒頭で、この世に生まれ出てくる赤ん坊に選択の余地はないことを我々読者は改めて知らされるのである。

マキューアンを読み慣れた読者であれば、彼が小説の出だしで見せる、あのあっと言わせる一工夫に定評があることは十分知っている。しかし、「語り手が女性の胎内にいる赤ん坊」と読者は推測できてにもわかに信じられないのが当然であろう。第一、現実的に考えて赤ん坊に意識があるのかも疑問である。マキューアンが意識的に 'womb' という語を避けているのも我々がにわかに納得できない手助けをしている。語り手がはっきりと胎内にいる赤ん坊と読者が認識できるのは、1章が終わる頃になる次のような文章からであろう。

But she never takes a third, and it wounds me.

'I have to think of a baby,' I hear her say as she covers her glass with a priggish hand. (*Nutshell*, p. 7)

ワイン好きの母親 Trudy が三杯目を勧められてグラスを手のひらで押さえ、「お腹の赤ちゃんに良くない」と語り手の 'I' がその言葉を聞く段になって初めて、この小説の語り手が胎内にいる赤ん坊と読者は納得がいくのである。

加えて、*Nutshell* が *Hamlet* のプロットを下地にしていることは、小説の epigraph で想像が付く。

Oh God, I could be bounded in a nutshell and count myself a king of infinite space—
were it not that I have bad dreams.

SHAKESPEARE, *Hamlet*

この文章は *Hamlet* からの引用で、ここからマキューアンは小説のタイトルを 'Nutshell' としたことが想像できる。母親 Trudy と伯父の Claude の何か良からぬことを企てている次のような会話からプロットが動き出す。

They airily bypass their vocal cords because they're planning a dreadful event. Should it go wrong, I've heard them say, their lives will be ruined. (*Nutshell*, p. 9)

母親の胎内にいる赤ん坊が語り手になる設定を思い付いたのはマキューアンが初めてではない。Tim Adams は以下のように述べている。

There have been plenty of novels inspired by Hamlet—Iris Murdoch's *The Black Prince*, John Updike's *Gertrude and Claudius*, even David Foster Wallace's *Infinite Jest*. And there have been one or two novels told in the voice of fetuses in the womb—Carlos Fuentes's *Christopher Unborn*, for example. But Ian McEwan's virtuoso entertainment is almost certainly the first to combine the two.⁴

Christopher Unborn は 1987 年に出版されたスペイン語で書かれたメキシコ文学で、作者も公に認めているように Laurence Sterne の *The life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* (1759–1767) から影響を受けている。'foetuse' (作中では実際 9 か月の胎児) が語り手になるのは小説史上この二つの作品しかないが、Tim Adams が述べているように胎児が語り手という設定に *Hamlet* のプロットを加えたのはまさにマキューアンが初めてである。

胎内の赤ん坊に意識があるのかどうか、医学的根拠はあるのかどうかは興味ある問題である。「サイエンス速報」は以下のような研究結果を発表している。

視覚的意識が始まる時点の高い信頼性で明らかにできる乳児の神経系のシグナルが発見された。視覚的意識とは、見て、見えたものを記憶する能力のことである。

現在まで、乳児の意識的知覚の実証は困難であった。乳児は短時間提示された情景を見たかどうか伝えることができないためである。また、意識の指標となる測定可能な行動（眼の動きなど）を示せたとしても、このような行動は、意識的知覚がない状態と関連した脳活動を示しているときの成人にも認められている。したがって、乳児の意識に関する信頼性の高い神経学的マーカーがあれば有用である。

これまでに、成人の意識に関する研究で、脳活動の独特な変化が、成人の自らの環境の知覚と関連していることが報告されていた。今回、Kouider らは、乳児の類似した神経学的マーカーを発見した。

5 か月～15 か月齢の乳児の脳活動を調べて、Kouider らは、成人が顔を短時間見せられてその顔を知っているかどうか報告するときに生じる独特の一連の神経学的イベントが、このタスクを行っている乳児の脳にも検出されることを明らかにした。これは検討したすべての年齢群の乳児に認められたが、シグナル伝達は年上の乳児ほど強力かつ持続的であった。

本研究の結果は、環境の意識的な処理の段階が、早ければ 5 か月の乳児から存在することを示している。また、本研究は、わずかに意識がある状態の人（口頭報告を行えない人）が周囲のことを把握できるかどうか評価する上で有用となりうる、意識的知覚マーカー候補を提供

している⁵。

この報告からすると5か月の胎児から意識があることが認められている。最初は聴覚から始まって音が聞こえるようになり、視覚へと移行して目が見えるようになる。つまり、*Nutshell*において胎児に意識があるのは医学的に証明されていることになる。胎児が外界の音を聞いていろいろと想像を巡らすのも全く不可能とは言えないのである。マキューアンは*Saturday* (2005) 執筆にあたって脳外科の手術にも立ち会い、かなり医学的な知識がある。最新の文献を読んで胎児の意識に関しては専門的な情報を仕入れていると思われる。

ただし、*Nutshell*における胎児は意識的知覚を通り越してかなりハイレベルな知的思考活動を行っている。胎児は実は男の子で生まれ出る国が、今や全盛時代であるノルウェーでもなく、料理がおいしく太陽がふりそそいでいるイタリアでもなく、赤ワイン (Pinot Noir) で有名な意気揚々とした自愛に満ちたフランスでもなく、以下のようなイギリスであると残念がって語っている。

Instead I'll inherit a less than united kingdom ruled by an esteemed elderly queen, where a businessman-prince, famed for his good works, his elixirs (cauliflower essence to purify the blood) and unconstitutional meddling, waits restively for his crown. This will be my home, and it will do. I might have emerged in North Korea, where succession is also uncontested but freedom and food are wanting. (*Nutshell*, pp. 3-4.)

‘united kingdom’ と小文字に表記されているのは EU 離脱に見られるイギリス国内の結束が乱れていることの指摘であるし、‘his elixirs’ や ‘unconstitutional meddling’ はチャールズ皇太子とダイアナ妃そしてカミラとの一連の騒動を暗に指摘しているものである。また現在国際社会を恐怖に巻き込んでいる北朝鮮問題もユーモアたっぷりに描かれている。マキューアンが語っているのではなく胎児の視点から語られているので読んでいて文句なく面白い。しかし、胎児が何かを聴き取っている、あるいは見ているという次元ではなく、国際社会をこのよう皮肉れるのは、現実的にはあり得ないことであり常軌を逸した語りである。それが *Nutshell* の小説の評価にネガティブな要素を与えるか否かは、読者の判断にむしろ任せられる問題であろう。

胎内の赤ん坊の視点から描く行為について、その医学的根拠は別にして、小説としての面白さがあるはずである。マキューアンは妊娠している義理の娘を前にしたときにこのユニークな語りの視点を思い付いた。一般的に小説の語りの視点としては、大まかに分けて第1人称、そして第3人称の視点がある。第1人称の場合、語り手は現実に存在するわけだから話の筋に何らかの影響を及ぼすが、限られた情報しか手に入らない。反対に第3人称は、いわゆる「神」としての存在だから全てを知っていても、現実の世界には存在しないので逆に話の筋には影響しない。*Nutshell* の語り手はこの二つの語りの視点両方を兼ね備えて持っている。現実の世界に彼は存在しているが胎内なので、話の筋に何ら影響を与えることはできない。できるのは、ただ母親 Trudy のお腹を蹴ることだけである。こう考えると *Nutshell* は悲劇の様相を呈する。しかし周りにいる全ての人の会話を聴き取ることができるし、部屋の中で立てる音によって彼らがどのような動作をしているのか想像できる。「神」としての存在だから、‘channel 4’ のラジオ番組からしか知識を得ない Trudy、車と服の話しかしない Claude、詩の世界に没頭するあまり世間知らずになっている John というようにそれぞれ登場人物の欠点を指摘することができる。こう考えると *Nutshell* が今度は喜劇の様相を呈するようになる。

2. 胎内に閉じ込められたハムレット

胎内の赤ん坊の視点から小説を描くことをマキューアンが思いついたのはまさに偶然で、上述したように妊娠している義理の娘と話しているときにその設定が彼に閃いたのである。ところが、*Hamlet* を下地にしようと思いついたのは幾分意図的であるに違いない。*Nutshell* が出版されたのが2016年で Shakespeare 生誕 400 年に当たるからである。プロットにおいて *Hamlet* からその多くを取り入れているし、かなり多くの場面で有名なセリフを引用している。

母親 Trudy が叔父 Claude と結託して父親を殺すのは、*Hamlet* において Gertrud(y)e が Claud(e)ius と共謀して父親を毒殺するメインプロットとまさに同じである。ハムレットがポロニアスをネズミと間違えて刺殺してしまう場面を想起させるように、Claude は Trudy を 'my mouse' と愛着を込めて呼ぶ。また Elodie は 'owl' をテーマに詩を創るが、それは気の狂ったオフィーリアが朗読する詩の中で「フクロウ」に言及する場面を我々に思い起こさせる。Claude は最初インド料理のテイクアウトをしようとするが 'Danish' 料理に変更する (*Nutshell*, p. 132)。 *Hamlet* はデンマークが舞台である。さらに次の引用は Claude が兄の耳の中に毒を入れればよかったという場面であるが、それはハムレットの父親がまさにそうやって毒殺された方法なのである。

'You know what? I was reading the other day. And I've just realized. It's what we should have used. Diphenhydramine. Kind of antihistamine. People are saying the Russians used it on that spy they locked in a sports bag. Poured it into his ear. Turned up the radiators before they left so the chemical dissolved in his tissues without a trace. (*Nutshell*, p. 117)

Hamlet では父親の亡霊が現れて自分が毒殺されたことをハムレットに告げるが、*Nutshell* においても父親 John の亡霊が次のように現れる。

This is a slow, heavy descent. They see black leather shoes, then a belted waist, a shirt stained with vomit, then a terrible expression, both blank and purposeful. My father wears the clothes he died in. It's not an hallucination. This is my corporeal father, John Cairncross, exactly as he is. My mother's moan of fear acts as an enticement, for he's walking toward us.

'John,' Claude says warily, on a rising tone, as if he could wake this figure into proper non-existence. 'John, it's us.' (*Nutshell*, pp. 186-187.)

父親 John の亡霊はこのあと何も話さずに Trudy を抱きしめてキスをしたあと立ち去る。胎児は、'I emerge from reveries to find us in the bedroom.' という文章が続くことから夢を見ていたことが分かる。実際に John の亡霊は現れなかったのである。*Hamlet* では父親の亡霊が毒殺されたことをハムレットに語るが、*Nutshell* ではもう胎児は父親が毒殺されたことを知っているの、自分が毒を飲まれたことを語っても意味がない。John はただ亡霊として現れただけである。実際 Trudy も Claude もこの亡霊を見ているわけではない。胎児だけがその妄想で遭遇しただけである。この John の亡霊が現れる場面は、*Hamlet* のプロットを多く取り入れたために面白いけ

れどもどこか ‘convincing’ に欠ける、余計な付け加えである観は拭えない。

3. 喜劇か悲劇か

次の場面は Trudy と Claude が父親 John に毒の入った果物ジュースを何とか飲ませようとする場面である。テーブルの上にはそのジュースが入ったカップが置かれている。彼らが勧めてもなかなか John はそのカップを取り上げようとはしない。Claude は用心のために台所から二人分の水の入ったグラスを持ってくる。3人が乾杯するためである。Trudy は先回 John が彼女との別れを記念して朗読した詩の素晴らしさを称えて乾杯しようと言うと彼はようやく毒の入ったカップを取り上げる。読者はこの場面を読んで喜劇と感ずるであろうか、はたまた悲劇と感ずるのであろうか。

‘What you have said was right. You brought it all back to me and it pierced my heart. It was a masterpiece, John, what we created. What’s happened since doesn’t lessen it. You were so wise to say that. It was beautiful. Nothing that happens in the future can wash it away. And even though it’s only water in my glass, I want to raise it to you, to us, and thank you for reminding me. It doesn’t matter whether love endures. What matters is that it exists. So. To love. As it was. And to Elodie.’ (Nutshell, p. 98.)

‘Elodie’ は John の詩に憧れを抱いている若い女性である。John は彼女を新しい恋人と Trudy と Claude に紹介するが、それは実は嘘で彼が Trudy に嫉妬を抱かせるのが目的だった。それは凶に当たって彼女は John の殺害を最終決定する。ともかくも、なかなか ‘smoothie’ を飲もうとしない John、それを見て彼の詩が大嫌いな Trudy がそれを褒め称えて何とか飲ませようとする場面はいささか滑稽である。二人の育んだ愛を歌った詩を Trudy に称賛された John はようやくジュースの入ったカップを取り上げようとする。

When my father speaks, he sounds closer. He’s coming back to the table.

‘Well,’ he says, most genially, ‘that’s the spirit.’

I swear the deathly, loving cup is in his hand.

Again, with both heels I kick and kick against his fate.

‘Oh, oh, little mole,’ my mother calls out in a sweet, maternal voice. ‘He’s waking up.’

‘You failed to mention my brother,’ John Cairncross says. It’s in his Manly poet’s nature to amplify another’s toast. ‘To our future loves, Claude And Elodie.’

‘To us all then,’ says Claude.

A silence. My mother’s glass is already empty.

Then comes my father’s drawn-out sigh of satisfaction. Exaggerated to a degree, merely out of politeness.

‘More sugary than usual. But not bad at all.’

The Styrofoam cup he sets upon the table makes a hollow sound. (Nutshell, p. 99.)

なかなかカップを取り上げようしない John に向かって心にもないお世辞で彼の詩を褒める Trudy。詩の世界にのめり込むあまり現実世界を忘れてしまっている John。若くて魅力的な

Trudy に惹かれ兄の不動産である家を手に入れようとする Claude。そして、何とか父親を助けようとして母親のお腹を蹴る名前がまだない胎児の男の子。この場面を読んで喜劇と感ずる読者が多いのではないだろうか。

この小論の冒頭で *Nutshell* のブラック・ユーモアはマキューアンの *Amsterdam* を想起させると書いたが、上記の場面が二人の男がお互いに毒を盛りあって死んでいく場面を想起させる要因になっている。小説の最後で John を殺害した Trudy と Claude が実はお互いを信用していなかったことが露呈する場面は一層 *Amsterdam* の結末を読者に思い起こさせる。

'It's started. It's so quick! Get an ambulance.'

He says nothing for a moment, then he asks simply, 'Where's my passport?'

The failure is mine. I underestimated him. The point in arriving early was to ruin Claude. I knew he was trouble. But I thought he loved my mother and would stay with her. I'm beginning to understand her fortitude. Over the bright jingling sound of coins against mascara case as he rummages through her handbag, she says, 'I hid it. Downstairs. Just in case this happened.'

(*Nutshell*, p. 194.)

Trudy は Claude が彼女とお腹の赤ん坊を捨てて出て行くことを予測して彼のパスポートを隠しておいたのである。胎児は Claude が彼らのことを置き去りにほしないうと楽観していたので母親の勇気に感服する。母親に早過ぎる破水をさせてしまった胎児、二人を置き去りにしようとする Claude、それを前もって予測していた Trudy。三者三様にドタバタしていて *Amsterdam* の結末を想起させるブラック・ユーモアである。

しかし、全てが喜劇といえそうでもない。薄ら寒い恐怖も垣間見られる。

'I was surprised. He looked peaceful. Except...' She draws a sharp, inward sigh. 'Except his mouth. It was so long, so wide, stretched almost ear to ear, like an insane smile. It was closed though. I was glad about that.'

(*Nutshell*, p. 143.)

John の死体の様子を Trudy でもなく Claude でもなく Elodie が語るから、それを聞いている二人と胎児にとって恐怖が増えるのである。Trudy は John が死んだあと自分たちの行為を反省して罪の意識にだんだんと苛まれる。考えてみれば、John には死に値するような責任はない。詩の世界に没頭するあまり俗世間を忘れて人に迷惑をかけるようなことはあっても、人から毒を盛られて死に追いやられるような事は行っていない。そのような彼を Trudy と Claude が結託して毒殺するところが喜劇にしても悲劇にしても読者を納得するような理由づけが行われていない。批評家が *Nutshell* に B⁺ の評価を与えた理由である。

4. 行動するハムレット

まんまと目的を達成できたと思う Claude と Trudy のもとに警部の Clare Allison が部下を伴って訪れる。彼女はただ状況の確認だと言いながらも彼らに執拗に、それも心理的に圧力を加える。Claude には Judd Street にあるジュース・バーに行かなかったか、また John から広いふちの帽子を借りなかったかと尋ねる (*Nutshell*, p. 174)。実は彼は John が自殺したように見せかけよう

としてそのジュース・バーに彼の帽子を被って行ったのである。John がそこで 'smoothie' を買ったと思わせるためである。毒入り 'smoothie' を飲ませたのは Trudy の住む家であったが、彼らはそれを魔法瓶に詰めて John の車の座席の下に忍ばせていた。勿論、彼らの指紋は付けないように細心の注意を払った。しかし、警部補の Clare にはもう一つ決定的な質問が用意されていた。

'But the real mystery is this. Not a single print on that glycol bottle.
Nothing on the cup. Just heard from forensics. Not a trace. So strange.

'Ah!' says Claude, but Trudy cuts across him. I should warn her. She mustn't be too eager. Her explanation comes out too fast. 'Gloves. Skin complaint. He was so ashamed of his hands.'

'These?'

My mother steps forward to look. It must be a printout of a photograph.

'Yes.'

'Didn' t have another pair?'

'No. But a lot, especially when he was feeling down.' (Nutshell, pp. 181-182)

John の車にあった魔法瓶から一つの指紋も検出されなかったのである。彼らは準備万端、それに対しても彼が皮膚病で手袋をはめていたことを警部に告げる。ところが、Clare はそのことをすでに調べ上げていたにもかかわらず意図的に二人に質問したのである。Trudy は手袋のスペアはないと答えるが、Clare はこのあと証拠を突きつける。車にあった手袋の人差し指と親指の間には無数の小さな蜘蛛の卵が付着していたのである。つまり、その手袋で魔法瓶に触っていれば、魔法瓶にも蜘蛛の卵が付着していたはずで、それがないとすれば John の指紋が付いていない毒の入った魔法瓶を誰かが車に忍ばせたことになる。Clare は明日また来ていくつかの疑問を整理すると言って、家を出て行く。Claude と Trudy は自分たちが追い込まれたことを知って翌日の朝国外へ逃亡しようと企てる。

胎児はここで行動を起こさなければ父親がうかばれないと思い、「行動するハムレット」になる。Trudy を破水させるのである。

I've come to a decision. Enough. My amniotic sac is the translucent silk purse, fine and strong, that contains me. It also holds the fluid that protects me from the world and its bad dreams. No longer. Time to join in. To end the endings. Time to begin. It's not easy to free my right arm lodged tight against my chest, or gain movement in my wrist. But now it's done. A forefinger is my special tool to remove my mother from the frame. Two weeks early and finger-nails so long. I make first attempt at an incision.

(Nutshell, p. 192.)

おわりに

この小説にモラルがあるとすれば、表面的にはやはり何の罪もない詩人の John を殺すことによって罪の意識に苛まれ警察に捕まり刑務所に入れられる Trudy, そして母親と赤ん坊を捨てて自分だけ助かろうとする Claude に最終的に罰が下されることであろう。この作品は決して *Hamlet* を

パロディー化しているのではなく、そのプロットを下地にすることによって、いわば誰もが知っている作品の力を借りることによって *Nutshell* は読んでいて面白い作品に仕上がっている。作品の完成度からすると議論の余地はあるであろうが、マキューアンの次の文章はこの世にこれから生まれ出る子供たちを気遣っている気持ちに溢れている。出産を間近に控えた義理の娘の一人の父親として、この世の中が平和で住みやすい世界であることを。それが *Nutshell* に隠されたメッセージであろう。

I want my life first, my due, my infinitesimal slice of endless time and one reliable chance of a consciousness. I'm owed a handful decades to try my luck on a freewheeling planet. That's the ride for me—the Wall of Life. I want my go. I want to become. Put another way, there's a book I want to read, not yet published, not yet written, though a start's been made. I want to read to the end of My History of the Twenty-First Century. I want to be there, on the last page, in my early eighties, frail but sprightly, dancing a jig on the evening of December 31st, 2099.

(*Nutshell*, p. 129)

《注》

- 1 *Atonement*, p. 40.
- 2 'Nutshell by Ian McEwan review—an elegiac masterpiece', *theguardian*.
- 3 Book Marks, lithub.com/bookmarks/
- 4 Adams, Tim. 'Nutshell by Ian McEwan review—a tragic hero in the making', <https://www.theguardian.com/books/2016/aug/30/nut>
- 5 「サイエンス速報 [脳] 赤ちゃんはいつから意識があるのか？早ければ5か月の乳児から」, blog.livedoor.jp/rikagaku/archives/27129492.html

引用文献

- Adams, Tim. 'Nutshell by Ian McEwan review—a tragic hero in the making', <https://www.theguardian.com/books/2016/aug/30/nut>
- Clanchy, Kate. 'Nutshell by Ian McEwan review—an elegiac masterpiece', <https://www.theguardian.com/books/2016/aug/27/nut>
- McEwan, Ian. *Amsterdam*, Jonathan Cape, 1998.
- _____. *Atonement*, Jonathan Cape, 2001.
- _____. *Black Dogs*, Jonathan Cape, 1992.
- _____. *Enduring Love*, Jonathan Cape, 1997.
- _____. *In Between the Sheets*, Vintage, 1997.
- _____. *Nutshell*, Vintage, 2016.